



## 「岡崎教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法会」 厳修

2014年5月15日

新教区教化テーマ『見つけよう、生まれた意義と生きる喜び～生活の中心に南無阿弥陀仏を～』  
発表！「岡崎教区9ヵ年教化研修計画」を立て、新たな一步を踏み出す

このたび5月15日、「岡崎教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法会」を、御同朋御同行の皆さまと共に相つとめさせていただきましたこと、御遠忌法会実行委員はじめ、教区内各位のご尽力のたまものと、あらためて深甚の敬意と謝念を表します。

ここに、御遠忌法会開催報告をさせていただき、これを機縁に「岡崎教区9ヵ年教化研修計画」を立て、今後岡崎教区は、新たな一步を踏み出してまいります。教区内各位の一層のご高配を賜りますようお願い申し上げます。

### 【2月 讃仰講演会 開催】

多様化する時代状況と現場に応じた仏事のあり方（仏事の回復）、また各寺院で抱えている課題や現代社会における寺院の役割（人の誕生）について岡崎教区の現状と課題を表明し、共に創造できる場、新たな一步を踏み出す場の機縁として「岡崎教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法会（以下、御遠忌法会）」をお迎えすべく、1年前に実行委員会が組織され、当日に向けた取り組みが行われてきました。

2月には、御遠忌法会が教区内の一人ひとりにとっての課題と歩みとなるよう、また当日のパネルディスカッションを実りあるものとするを願って、御遠忌法会の講師とパネリストによる「讃仰講演会」が3会場で開催されました。

ケネスタナカ氏（武蔵野大学教授）は、「アメリカでは仏教の歴史は150年程しかなく、初めから現代仏教であったために、現代人のニーズに応えようとする気持ちが強く、人が何を求めているかを知らないということは許されない厳しさがある。一方、昔ながらの農村中心の共同体の中にある日本の浄土真宗は、現代化・都市化した中でどう対応するかを考える時期にある。そのためには、お寺を支える「組織」から見直していく必要があるのではないか」と語られました。

戸次公正氏（大阪教区南溟寺住職）は、「地域の伝道・教化活動を点検していくとき、その地域の「特性」と「独自性」についてしっかり確認する必要がある。岡崎教区には真宗の宗風回復が可能な土徳がある」と指摘されました。また、自身は「大阪が雑多な宗教性のるつぼという風土（特性）を考え、日本語で読む真宗の法要（独自性）を始めた。私たちが「正信偈」「和讃」を受け継いできた伝統を一度客観化して受け取り直すことが抜けたら、ただの習俗や形骸・因習になってしまう可能性もある」とも指摘をされました。

## ○ 御遠忌通信



真城義麿氏（四国教区善照寺住職）は、「私たちの先輩方は、人が生活する所に聞法の間が必要としてお寺を建てられた。さらに進んで、自分の家の中に御本尊をお迎えし、お内仏として聞法する場を持った。それが伝統として継承されてきた意味をもう一度確かめ直したい」と語られました。

各回ともに多くの参加者があり、講師のお話に頷きながら耳を傾けておられる方、熱心にメモをとられる方の姿があり、御遠忌法会をお迎えするための課題共有の一步となりました。

### 【5月15日 御遠忌法会 厳修】



5月15日、愛知県岡崎市民会館を会場に、「岡崎教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法会」が厳修され、約1300の方が参詣されました。

法要の部では、これまでの伝統的な儀式作法を重んじつつも、經典の教えにふれ、仏事を聞法の間としていく取り組みとして、実行委員が中心となり行った現代語訳を載せて勤行本を製作し執り行われました。「往観偈（おうごんげ）」は、無量寿経の中でお釈迦さま自らが詠われ、阿弥陀さまの功德をほめ讃えられている唯一の偈文であります。親鸞聖人もご自身の著作『教行信証』『尊号真像銘文』の中で何度も引用されている真宗門徒にとって重要な偈文であり、「往観偈」原文と七五調の現代語訳を交互に詠まれる新たな試みからはじまりました。この取り組みは、仏の教えが儀式・荘厳によって表現され



てきた伝統を改めて考えさせられました。戸次氏の言われる「伝統として受け継がれてきた儀式を、私たち一人ひとりが主体的に一度客観化して受け取り直すということが抜けたら、ただの習俗・形骸・因習になってしまう」ということを、法事・葬儀の形骸化が進んでいる現代において、また聞法を基本とする真宗門徒の危機感として失ってはならないと考えさせられる場となりました。

## ○ 御遠忌通信



「生活と仏事」と題した真城義麿氏による基調講演では、「自分を教えに照らして省みる場として、先達はお内仏や報恩講をはじめとした仏事の伝統を残してくれた。しかし、私たちは「お内仏」が法事を勤めるための道具にしかなくておらず、お内仏・ご本尊を中心といただいていない日常生活を過ごしている。いつもお金・健康・損得などに振り回され、お念仏一つで救われると言われても、それを素直にうなずけない身の事実がある。宗祖親鸞聖人は苦悩の末、法然上人との出遇いから、「ただ念仏して弥陀にたすけまいらすべし」、このこと一つを教えられた。その灯火・願いを伝えられてきた私たちは、本日の御遠忌法会を機縁に、もう一度親鸞聖人と出遇い直ししていかねばならない」と語られました。

パネルディスカッションでは、2月開催の「讃仰講演会」講師でもある真城義麿氏、戸次公正氏、ケネスタナカ氏をパネリストに迎え、渡邊晃純氏（岡崎教区守綱寺住職）がコーディネーターをつとめました。戸次氏はお経や正信偈の意識に取り組み、現代に即した法事のあり方を模索している経験から、「難しいことを易しく、易しいことを深く、深いことをおもしろく」伝えることの試みと難しさについて語られました。



タナカ氏は在米経験から「アメリカでは宗教は伝統だけでは通じず、人が何を求めているかに応えていくことが大切。お寺は教えを中心柱とした大きなテントのように間口を広げ、まずはその下に誰でも入れるような場をつくる必要があるのではないか」と語られました。三者共に、私たちにまで伝えられてきた灯火・願いをいただき、一人ひとりが問いを持ち続け、考えていく歩みが大切ではないかと、課題を投げかけた場となりました。



その後、実行委員が岡崎教区のこれまでの取り組みを振り返り、それを受け策定された新教区教化テーマ『見つけよう、生まれた意義と生きる喜び～生活の中心に南無阿弥陀仏を～』のもと、来る2023年、親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年を視野に入れ、岡崎教区9カ年教化研修計画に基づき新たな一步を踏み出すと宣言しました。酒井克彦教区門徒会長は「私たち岡崎教区は、いよいよ僧侶・門徒が共に親鸞聖人の教えを学び、新教区教化テーマのもと、仏さまの願いに目覚めてまいりたいと意を新たにしました」と挨拶し、御遠忌法会を閉会しました。